［京都編］

みやこ暮らしの楽しみ

麻生圭子 エッセイスト

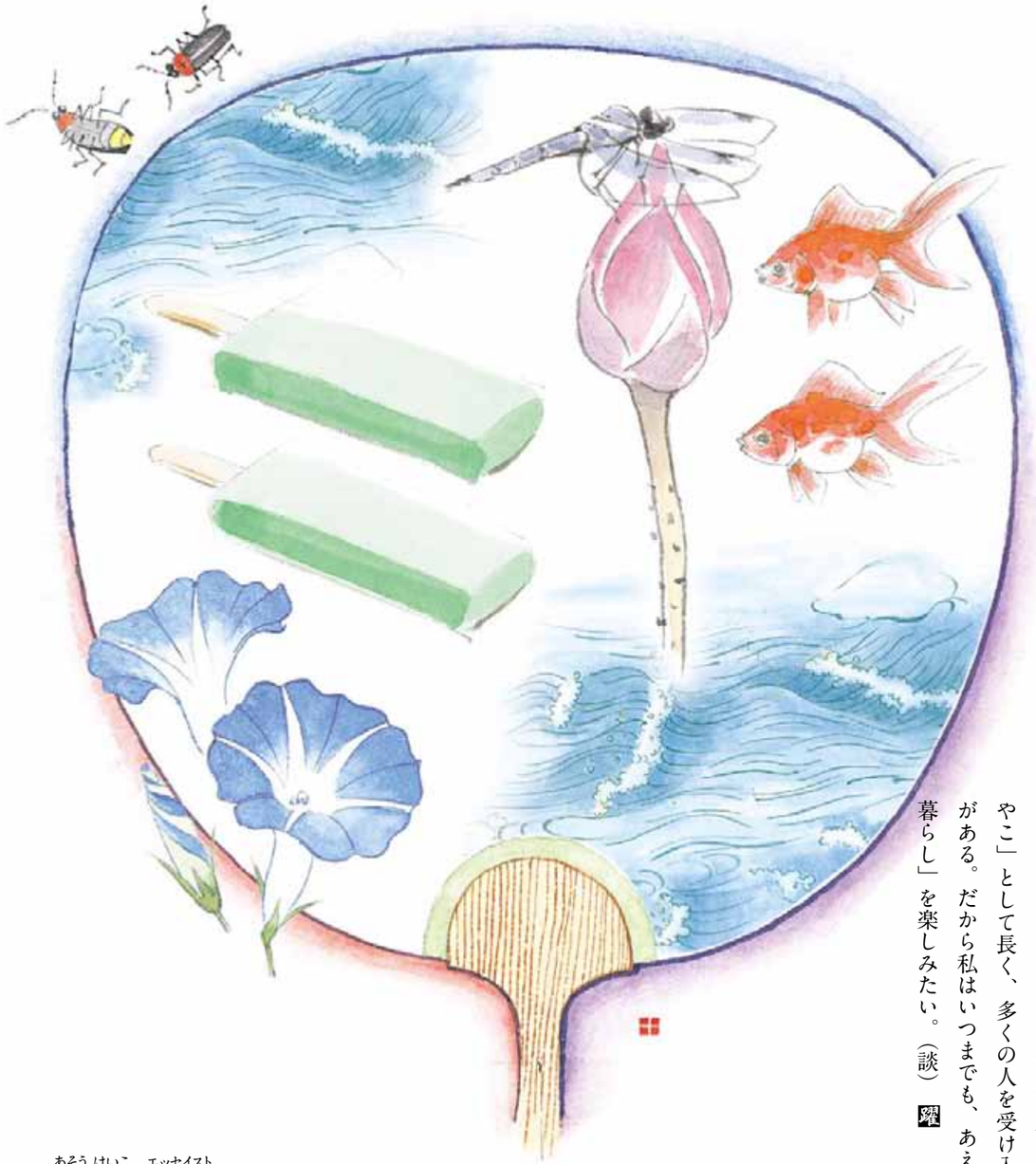
私が京都に移り住んだ頃、地元の人に「地方から来た人」と言われたことがある。えっ？　東京から来たんだけど……。

東京人が「地方」と言うとき、「田舎者」のニュアンスを含む。京都では、単に地元以外の「他方」でしかないようだが、さすが古都、千年の都の価値観に触れた気がしたものだった。

そして十三年、ずっと続けてきたのは京都でしかできない暮らしを楽しむこと。東京は「上を目指す」街、京都は「奥を極める」街。私自身、東京での作詞家時代は、他人と競ってヒットチャート上位を目指していたが、京都で上を目指すのは「成り上がり」。決して褒められることはない。例えば、東京が「主流」なら、大阪や名古屋は「反主流」。互いにライバル関係にあるが、京都はいわば「非主流」。「東京なんて」という矜持で独自の道を歩んでいる。街も生き方も、同じ指標でなく、それぞれ違うものを目指した方が面白い。

だから京都ならではの暮らし方――山に囲まれ自然が残り歴史・文化が息づく街で、自然と向きあい伝統的な日本の暮らしを楽しんでいる。古い町家を修復して住み、毎朝、雑巾がけや、庭の掃除、苔を絶やさないために水やりをしたり。大変だけど、とても楽しい。便利な暮らしはラクだけど、楽しくない。もちろん仕事は便利な方がいいからメールもパソコンも使うけど、暮らしはあえて不便なこともやってみる。例えば夏の暮らしもエアコンではなく、打ち水をして風を採り入れてみる。その方が四季を感じやすいし、それが実は地球温暖化防止にほんの少しつながったりする。

心がけているのは、毎日を丁寧に暮らすこと。そうすれば、京都に残る日本的な暮らしの「奥」が見えてくる。京都に来た頃に比べると、少し奥に入れたかなと思う。といって私は「京都人」になりたかったり、憧れているわけではない。だって、京都は「排他的」だとよく言われるけれど、本当は「よそ者」にとても優しい街。「みやこ」として長く、多くの人を受け入れてきた「もてなしの文化」がある。だから私はいつまでも、あえて「よそ者」として「みやこ暮らし」を楽しみたい。（談）



あそう けいこ　エッセイスト
1957年大分県生まれ、東京育ち。作詞家を経て、現在はエッセイスト。96年に京都在。99年より築70年の町家に移り住む。主な著書に「東京育ちの京都案内」「東京育ちの京町家暮らし」「極楽のあまり風」「東京育ちの京都探訪 ～火水さまの京～」（文藝春秋）、「京都がくれた『小さな生活』」「小さな 食 京都案内」（集英社be文庫）、「茶わん眼鏡で見た、京の二十四節気」（日本経済新聞出版社）などがある。新刊の京都案内は2008年6月出版予定。

作画：田坪良次　京都市立芸術大学名誉教授；大阪人間科学大学教授（環境デザイン）